

## エピローグ

# 蝶に響かれて

街の曲がり角をモニカが傘をさし、ドレスの裾すそを持ちながら  
潇洒しょうしやに歩いてきた。その落ち着き払った様子は、サブリナの  
見窄みすぼらしい姿とは対照的だった。サブリナは鼻の奥がツーン  
と痛み、数多くの糸筋が絡み合い、もはや誰が正しくて誰が間  
違っているかを言い表せられないほど多くの関わりかかがあった。

「もし昨日の遠足、失礼なことをしたとしたら、ごめんなさい」  
そう言って、深く頭を下げた。相手は頷くだけで、何も言い

返さなかった。

エピソード 蝶に導かれて

サブリナは重い足取りで家に帰り、魂が抜けたようになった。四肢が束縛そくばくされる感じがして、カが入らない。流れていた涙は、やがて嗚咽おえつに変わった。部屋の中は啜り泣く声と呼吸の音だけがほのかに響いていた。ベッドに倒れ込むと、ほぼ秒で暗闇に沈み、体は無限の挫折感ざせつかんに飲み込まれた。煙けむったような青白いあかつき暁の薄明うすあかりがカーテンの隙間から入ってきて、昼間の日差しが部屋の中を明るく照らしても、起き上がる気になれず、この残酷な現実には直面したくなかった。意識は朦朧もうろうとする間で浮き漂っていて、どれだけ眠ったのかわからなくなるころ、もうそれ以上眠れなくなった。起き上がって、カーテンを開けると、

眩しい陽光が射し込んだ。瞳孔は瞬時に収縮し、思い切り目を閉じた。再び両眼を開けると、世界はもうあの夜嵐の跡はなく、ただ道にある水溜まりだけが、ダンスパーティーの出来事を証していた。窓の外から蝶が羽ばたいてきて、一刻も止まらずに飛び去った。かつての咲き乱れはみな浮雲と同じく虚しく、一周回って元の場所に戻ったと感ずる。彼女は会得した。その時間がどんなに煌めいていたとしても、幕を閉じる時が来る。そして、これらの日々における執着と待望は明らかに笑い話になった。鏡の中の自分の長い髪を見つめ、指先を髪の間を滑らせると、なんとハサミを取り、カッチと思いついて一刀両断に切り捨てた。今、断ち切ったのは髪だけではなく、ここ数日間の不愉快でもあるのだ。

少女は語り終え、気がつくとその顔一面に涙が溢れていた。手を震わせながら拭い去り、涙の痕がまだらに残った。たった三ヶ月のことなのに、彼女にとっては一生かかっても釈然としないものになるかもしれない。時の風に乗って、心の傷が癒やされることを願うしかなかったが、卒業するまで、彼女たちは見知らぬ人になり、お互い関わりなくなっただのだ。まるで、その決して渡すことのできない謝りの手紙のように。全身全霊で頑張っていたとしても、結局は平行線を辿るしかなかった。

その時、どこからともなくやって来た蝶が、手の側に置かれ

た封筒の上に停とまった。彼女は蝶を凝望ぎやうぼうし、最後の言葉を残した。

「私は自分が悪いことをしたとは思っていない。ただし、レイラのことだけは、こんなに長く誤解してしまっていた。初めの頃は本当に懂しんれていたのに、小人しょうじんの挑発を信じて、自分の本心を忘れてしまった。たとえ最後に和解しても、もはや会わせる顔がない。私は自分のことを許せない。彼女には借りがある」

それを聞いたエイヴリーは息を呑のみ、真実しんじつを明かした。

「実は、あの日のパーティーで雨の中を立ち去る姿を見て、ついで行っただ。それでモニカとのやりとりを見たんだよ。多分サブリーナの謝罪がその良心を呼び覚ましたんだろうね。彼女は帰るサブリーナの背中に向かってこう叫んだんだよ。『結局のと

ころ、うたが悪かった。今、うたのせいで孤立無援なのね。でもうちはただジャンナに近づく理由が欲しかっただけ。もし君とレイラが敵対すれば、ジャンナは私に気づく可能性がある。そして、昨日デラニーを助けなければ、みんなから非難される。それじゃ、うちはどうやって人としてやっていけるの？だから私を責めないでくれ！」って。あたしはその時から、事態が単純ではないことを悟った。こんなに複雑だったとは。」

サブリナは目から鱗が落ちるような感銘を受けた。遺憾は人生の常で、欠けることはない。そして、現実は映画ではなく、白黒をつける判断は存在しない。心臓さえも左に偏っているように、すべての人は欲望と良知の間で、判断を下している。この世界にあるのは、精緻な灰色だけだ。だから、みんな良い人

たちなののに、共に短い旅をして別れる人もいる。それで十分だ。ちょうど窓の外の夕焼けが空の半分を赤く染め上げた。少女は光の中に座っていた。空一面に広がる色鮮やかな色彩は、まるで彼女の青春のようだった。若かりし日の思い出は、心の奥底に閉じ込められ、年月を経て濃艶な印に綴られ、心を彩る。これは運命によって創られた歌であり、青春は明媚な鬱の一篇となるのである。